

寺子屋ガイド

※題字／森川芳聲

もくじ

- 2 巻頭言『歴史と記憶』……………山口 秀範
- 3 鄙爺日記その①……………猪部 敬彦
- 4 偉人レポート……………正田 英樹
- 7 世界へ、寺子屋……………水崎 之子
- 8 死支度と友情②……………廣木 寧
- 10 TERAKOYAふおとればーと
- 11 “あちこちde寺子屋”のご案内
- 12 碑のころ(17) 編集余録



山口大神宮 内宮下宮

碑のころ

高嶺城跡

山口市上宇野令

※詳しく解説は12頁に掲載しております

『歴史と記憶』

代表世話役

山口秀範

不安な時代

時は春、桜が散るとともに様々な花が後を追ひ、やがて新緑の眩しい季節へと段階的に移っていく筈の、一年で最も輝く時候を迎えています。既に夏の到来かと思わせる日も混じり、日本人の心を育んできた四季の移ろいは何処へ行ったのかと不安が募ります。

政治も、多くの皆様と同じ様に、大きな不安の材料です。世はトランプ関税で大騒ぎですが、国益追及はいつの時代も国際政治の常套でしょう。問題はそれに対峙する我が国の覚悟とあり方ですが、現政府の肚が据わっているとはとても思えません。近隣諸国の無軌道さと相俟って、日本は何処へ行くのかと大変気懸りです。

そして何よりも、世相に現れる国民の心情が益々根無し草へと向かい、取り返しつかない処へ赴くことを傍観するしか術がないという焦燥感、年々高まっています。

夏目漱石の苦闘

そんな折に、盟友廣木寧氏が、六冊目の著書を出版しました。

学生時代からの旺盛な読書と思索に基づく論考は、心ある読者たちにその都度、現代日本の危うさを静かに訴えて来ました。最近刊の『歴史と記憶』でも、明治の文豪夏目漱石や森鷗外が生きた「近代」という時代に、それまで長く培ってきた日本らしさが凌駕されていく有様を明らかにしています。

その状況を漱石は「現代日本の開化」と題した講演で、「西洋で百年かゝつて漸く今日に発展した開化を日本人が十年に年期をつめて、しかも空虚の譏を免かれるやう

に、誰が見ても内発的であると認める様な推移をやらうとすれば是亦由々しき結果に陥るのであります」と表現しました。つまり、文明開化に邁進した日本人は、それを自分たち自身の内心から湧き出る必要不可欠なものとはし切れず、身の丈に合わないまま吸収してしまったと言うのです。その中で、自らは内発的に西洋に立ち向かうという「過酷な労働」に従事した漱石の命がけの文学活動を、廣木氏は愛惜をもって辿り続けています。

森鷗外の晩年

一方、森鷗外は晩年『渋江抽斎』をはじめとする史伝を次々と世に問います。鷗外も西洋文明が奔流する中、その影響を受けない前の日本人を発掘することで時代と戦おうとしたのです。その様につき、鷗外から親友宛の手紙（「仕事」）ヲヤメテ一年長ク呼吸シテキルトヤメズ二年早ク此世ヲオイトマ申ストドツチガイイカ考物デアル」を示すのですが、廣木氏自身も文章を遺す作業が出来ないのなら生きていく甲斐はないと思いついてるのです。

そう言えば廣木氏の随想には懸命に生きた人の死が多く扱われています。歴史を主題とするので死が関わるのは当然ながら、そもそも著者自身が常に死を意識し、生ある内に思いの丈を文章に留めようとする営みを長年続けて来たのでしょうか。

江戸時代に書かれた『葉隠』の中に次の一節があります。「必死の観念、一日仕切りなる（日々新たに）すべし・（様々な死に）さま、末期のことを考え）朝毎に懈怠なく死して置くべし」。この世にはいつ何が起るか知れないので、毎朝今日までの命だと観念した上でなすべきことに向かいなさいという教えと理解していますが、廣木氏の文章には『葉隠』に似た雰囲気漂っているのです。

外圧との闘いの歴史

本書には「信長、秀吉とバテレンの戦い」と題する論考も収められています。今日では秀吉の個人的野望と片付けられている朝鮮出兵を、スペインの世界征服阻止という視点で再構築する潮流を紹介しつつ、「世界史」を鳥瞰することが不得意な日本人に覚醒を促す内容です。

歌人の会津八二が聖徳太子への思慕を歌った和歌を紹介した一文も印象深いのですが、聖徳太子も蘇我氏の謂わば「非日本の独裁」を食い止めようと苦闘し続けた方でした。

そう見てくると、古代からいつの時代も先人たちは外来文化と戦って来たのです。そしてこの戦いは近年益々熾烈になっており、所謂グローバル化の波は本来の日本人の心を蝕み続けています。

廣木氏はそんな現状に絶望しています。漱石や鷗外がそして小林秀雄たちが希求した日本は、最早回復不可能だと諦めているようです。その上で自分のなすべきことは古典を繙き「確かに存在した」日本を、命ある限り書き残そうと覚悟を決めているようです。

決して容易に読み流せる本ではありませんが、目次には「ドストエフスキーと吉田松陰」や「福沢諭吉とカズオ・イシグロ氏」など、滅多にない組み合わせで興味をそそる随想も用意されています。是非一読をお勧めします。

絶望しない

廣木氏は絶望している現代日本ですが、私はまだ好転の可能性を諦められません。それが小中貫校「志明館」の存在です。開校から二年、目ざす理想の学び舎にはまだまだこれからですが、伸び伸びと闊達に学ぶ子供たちの将来を思い描きながら、挑戦を続けます。

本誌「寺子屋だより」の編集長として次号より、廣木寧氏が再び咲きます。

二年間務めて新風を吹き込んでくれた元木哲三氏に深甚の感謝を捧げます。